27　裁縫箱・裁縫道具　木内半古ほか

一具

昭和三年（一九二八）　木象嵌
（裁縫箱）三三・〇×二四・二×一一・一

内部に鋏や鏝、糸巻や針山などの裁縫道具一式を納めた裁縫箱。『源氏物語』初音の帖にみえる「年月を松にひかれてふる人に今日鶯の初音きかせよ」の和歌を意匠としており、蓋面から側面にかけて梅に松、橘、鶯や流水を配して、歌文字を散らしている。箱の材は桐で、玳瑁や染めた鹿角、貝、唐木、彫漆などを華やかに象嵌している。箱の底裏に「時ニ年七十又四　半古作」と刻銘があり、木工と象嵌は木内半古（一八五五～一九三三）による。意匠は東京美術学教授島田佳矣、裁縫道具の金工を市島昌邦、蒔絵は堀井正文、畳紙は吉村忠夫が担当している。半古は、明治二十六年より正倉院御物整理に木工家として参加しており、この時の研究の成果が本作品の技法や材料にも現れている。その一例として、裁縫道具のうち白墨斗は、正倉院宝物の《紫檀銀絵小墨斗》（中倉一一六）を模したもの。宝物の墨斗は、明治三十七年に塵芥中から発見され、半古が修補を手がけたと伝えられる。大正十三年皇太子（昭和天皇）御結婚に際して制作が計画され、昭和三年に完成した一対の御飾棚のうち、香淳皇后へ献上された《鶴桐文様蒔絵飾棚》に付属の棚飾品のひとつである。

28　菊蒔絵硯箱　赤塚自得

一合

昭和三年（一九二八）　蒔絵
二四・五×二三・三×一〇・〇

蓋の甲を高く盛り上げ、全体が丸みを帯びた形が特徴的な硯箱。素地は乾漆によるものと推察される。蓋表と側面にかけて重なり合うように咲く大輪の八重菊の花が高蒔絵で表されており、その金地や高蒔絵の肌合いにマットな独特の重厚感がある。内側は艶のある金地に仕立て、五羽の蝶を高蒔絵で表し、硯や筆などの各道具を納める。硯箱の形や内部の道具の配置は、国宝《舟橋蒔絵硯箱》（東京国立博物館蔵）や、後に尾形光琳がこれに倣って制作した幾つかの硯箱に範を得ていると考えられる。

作者の赤塚自得（一八七四～一九三六）は、江戸で代々蒔絵を業とする家に生まれ、自得はその七代目にあたる。大正から昭和にかけて活躍、各展覧会の審査員を務め、昭和五年には帝国芸術院会員となった。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

古典再生——作家たちの挑戦

三の丸尚蔵館展覧会図録No. 72

編集　宮内庁三の丸尚蔵館

制作　株式会社 東京美術

翻訳　黒川廣子

発行　宮内庁

平成二十八年三月二十六日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan